令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　災害が教えてくれたこと　」

鹿児島県　瀬戸内町立古仁屋中学校　１年　千葉（ちば）　航之介（こうのすけ）

６月 22 日の夜、僕の家は床上浸水の被害に合いました。梅雨前線の影響を受け、奄美地方に「線状降水帯」が発生したのです。

僕は２年前からこの家に住んでいます。父を埼玉に残し、親子４人で暮らしています。父の代わりにがんばらなきゃという思いはありましたが、こんな被害の時にその時がくるなんて、想像もしていませんでした。

周りの様子から、「危ない」と思ったときにはすでに玄関に水が入ってきていました。僕はあせって、

「早くひ難所へ行こう。」

と、言いました。僕は、父の代わりに家族を守る手段は「ひ難しよう」というくらいしか思いつきませんでした。妹は怖くて泣いていました。

ひ難を開始すると、川の氾濫によって僕の腰の位置辺りまで水位が上がっていました。とても怖くて、母の手をぎゅっとにぎりしめていました。

避難所へ着くと、集落の方々が心配して声をかけてくれたり、タオルなどを持ってきてくれたりしました。泣いていた妹も、近所のおばちゃんに笑顔で話していました。集落の方々の親切によって僕の不安な気持ちが和らぎました。

けれども、家のことが心配で、外の様子ばかりが気になりました。雨は降り続き、やむ気配はありません。心配で、寝ている場合ではないと目をこすり過ごしました。

夜中に水が引いたという連絡があったので、母と２人で家へ向かいました。懐中電灯で照らした家の中は、泥まみれで、とても臭かったです。僕は絶望を感じ、もうこの家には住めないかもしれないと思いました。朝、あらためて家に戻ると、被害の大きさがわかりました。柱には上昇した水位の跡が残っていました。中の様子を見てすぐに、住める状態ではないことが理解できました。

家の様子を見に来てくれた集落の方々は、

「大変だね。うちの家に泊まってもいいよ。」

「なにか必要なものがあれば言ってね。」

など、優しい声をかけてくれました。ぽっかりあいた僕の気持ちを埋めてくれるようでした。

埼玉に暮らす父も心配でかけつけてくれました。父の顔を見てほっとする自分がいました。父も家の様子をみながら、

「これはすごいな。怖かっただろう。だけど、みんな無事でよかったよ。」

と言いました。

家の片付けは、ものすごく大変でした。へんな匂いはするし、水を含んだ畳はものすごく重たくて運び出すのに苦労しました。床を拭いたり、泥を水で洗い流したりしました。そんな時にも、集落の方は手伝いをしてくれました。時には、おにぎりなども差し入れてくれました。親戚でもない僕たちに、とても優しくしてくれる集落の方の気持ちがうれしくて、片付けにも力が入りました。またこの家に住みたい、この優しさあふれる集落から離れたくないという気持ちが強かったです。

みんなの協力のおかげで、泥まみれの家もきれいになり、戻って来ることができました。まわりの方々の協力がなければ、この家に戻ってくることは出来なかったでしょう。

僕の住む集落にはお年寄りがたくさんいます。歩くことも不自由なお年寄りにも早めのひ難を呼びかけ、お手伝いしたいと思いました。集落の方々から頂いた優しさの恩返しがしたいです。

幸い、この雨の被害で、僕の家は片付けをして住めるようになりました。しかし、この雨により同じ町内の違う場所では、土砂崩れにより道路が遮断され、通行止めになりました。また、土石流により、みかん畑やハウスが大きな被害を受けたところもあります。もしも僕の家にも大きな岩が押し寄せたらと思うと怖くてたまりません。道路や、畑被害は僕の家と違って、元に戻るまでには

時間がかかるし、僕以上に、気持ちも滅入るかもしれません。けれども、人的被害がなかったことが、唯一の救いだったと思います。

今後、どんな災害がおこるかわかりませんが、父のかわりに家族と自分の命を守る行動が出来るように心がけたいです。

僕は、今回、このような被害に合いましたが、人の優しさを感じることができました。そして、何より、家族が無事であったことが一番だったと思います。